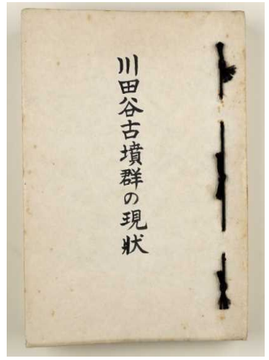
川田谷古墳群研究の先覚者
栗原　司　氏の業績

平成27年夏、栗原家から当館に資料の寄託がなされ、当館では、栗原氏の業績を川田谷古墳群の資料とともに展示し、地域の歴史と向き合った先人の姿を紹介することとした。

栗原氏は、昭和２年（1927）に桶川市に生まれ、旧制浦和中学を経て國學院大学文学部国文学科を卒業されている。

県立蕨高等学校や大宮高等学校で教職に就き、その傍ら、川田谷古墳群の研究を進めた。



調査は、徹底した聞き取りとともに現地踏査を行い、膨大な調査記録を作成し、昭和35年（1960）に『川田谷古墳群の現状』にその成果をまとめておられる。

栗原氏は、調査の動機を次のとおり述べておられる。

> 筆者はこの土地に住む者としてこの土地を愛して止まず、この国土に生をうけた者としてこの国土を愛して止まない。ただそのこころから本稿は纏められたのであって、今後も一層内容を精緻確実にし、専門の学者の研究のための資料を作成したいと念じているのである。

昭和40年代に入り、川田谷古墳群の考古学的な調査が文化財保護行政の立場から行われるようになったころ、調査報告の中に、栗原司氏の助言を得たことが記されてる。

また、遺跡の破壊が進む中で、栗原氏が採集され、現代に伝えてくださった埴輪などの資料は、川田谷古墳群の研究に欠くことができないものとなっている。

栗原　司氏収集の人物埴輪

展示の趣旨

桶川市の西部、荒川に沿う川田谷地区の台地には、４世紀から７世紀にわたる古墳時代に、数多くの古墳が築かれました。

明治時代以降、これらの古墳は世に知られることとなり、今日に至るまで、埼玉県の古墳時代研究に多くの資料をもたらし、川田谷古墳群と呼ばれています。

今回の展示では、当館所蔵の川田谷古墳群出土品に加え、古墳が消滅する危機の中で、資料を収集し、記録を作成してくださった市民の業績を併せて紹介します。

展示資料

〔館蔵資料〕
- ひさご塚古墳出土品
- 原山23号古墳出土品
- 西台２号古墳出土品
- 城髪山２号古墳出土品
- 若宮Ⅱ遺跡出土品
- 氷川神社裏古墳出土品（参考資料）

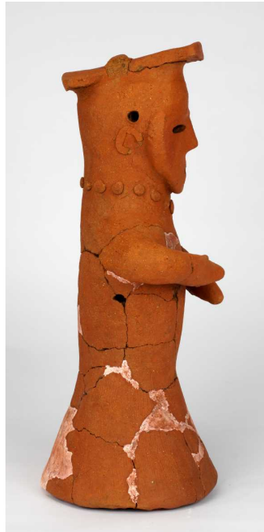
〔特別出品〕
- 栗原司氏採集資料（人物埴輪）
- 栗原司氏調査記録　著作原稿

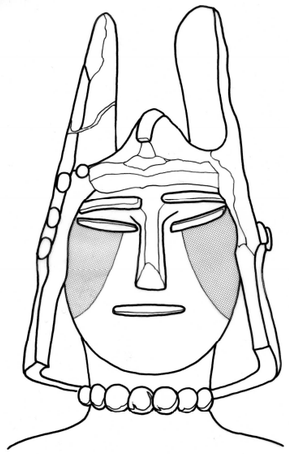
〔企画展関連展示〕
- 台原遺跡出土資料
- 宮前遺跡第２次発掘調査資料

桶川市歴史民俗資料館
〒363-0027　桶川市川田谷4405-4
川田谷生涯学習センター内
電話　048-786-4030

小企画展示

再発見！
川田谷古墳群





〔展示期間〕
平成28年２月６日（土）から平成28年３月18日（金）
※休館日　月曜日

〔開館時間〕
午前９時から午後４時30分

桶川市歴史民俗資料館

川田谷古墳群　研究の歩み

古墳時代の後期にあたる６世紀から７世紀にかけて、古墳の数は激増し、小規模な古墳が群集する古墳群が形作られるようになる。

桶川市内でも、荒川に沿う川田谷の台地に、70基前後の古墳が築かれたと推定され、これを川田谷古墳群と呼んでいる。

江戸時代後期の『新編武蔵風土記稿』の川田谷村の項に、古墳の存在を示す記述がある。

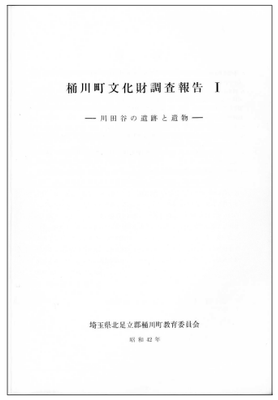
八幡社
近き年村民社辺の地を穿ちしとき、円形七八寸許なる瓶二つ掘り出せしが、その中に丹の丸せしの如きもの納ありと云、明器の類なるべければ、墳墓ならん、村民の持。

王子稲荷社
四十年前社傍の土中より石櫃を穿出せり、中に甲冑大刀等数多くあり、又円形二寸許の玉の如きものの出たる由、今皆失ひて冑の鉢一つ残したれども半ば毀損せり、これも前の八幡の地と同く墳墓などの跡なるべし。

川田谷古墳群は、家屋敷や農地の中にあったこともあり、明治時代になると耕地の拡大によって姿を消していった。その中で、埴輪が姿を現し、墓室である石室が開かれ、副葬品が発見されるようになった。この時代の出土品の一部は、現在も東京国立博物館に所蔵されている。

昭和40年代になると、開発の進展の中で埋蔵文化財として古墳を保護することが始まり、昭和42年（1967）８月のひさご塚古墳の緊急発掘調査をはじめとして、いくつかの古墳が調査され、発掘調査報告書が作成されている。

また、昭和46年（1971）には、古墳群の姿をとどめる原山支群の一部が「原山古墳群」として桶川市指定文化財となり、９基の古墳が保存されることになった。

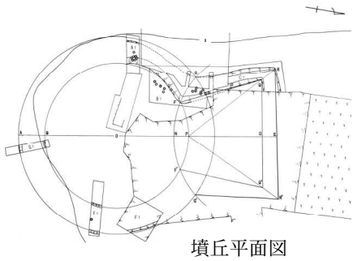


『桶川町文化財調査報告書Ⅰ
－川田谷の遺跡と遺物－』
昭和42年（1967）

ひさご塚古墳　発掘調査　昭和42年（1967）

ひさご塚古墳

昭和42年（1967）に、緊急発掘調査が行われ、川田谷古墳群における最初の考古学的な発掘調査となった。


墳丘平面図

調査の結果、全長41ｍの規模をもつ前方後円墳であることが確認された。

調査は石室にも破壊が及ぶ中で緊急に行われたため、発見された副葬品の数は少なく、また、保存状態も良好ではない。

直刀の破片や鉄鏃の他、轡（くつわ）や辻金具、鐙（あぶみ）などの馬具を含み、その一部には金張りの痕跡を残す。

石室から発見された馬具

ひさご塚古墳の年代を知る資料としては墳丘から採集された須恵器蓋坏があり、６世紀第４四半期に属するものである。

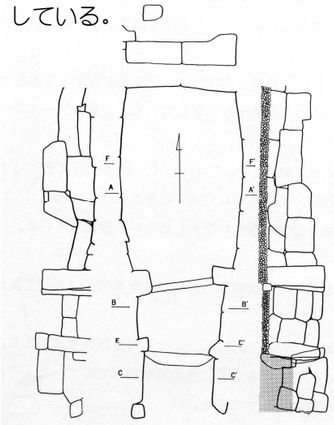
城髪山２号古墳

城髪山古墳は、ひさご塚古墳と同じく川田谷古墳群柏原支群にある。昭和44年（1969）２月から３月初旬にかけて、緊急発掘調査が行われた。

全長4.20ｍの横穴式石室は、前室を備える複室構造の墓室をもち、その側壁が張り出し、床面には厚く小石が敷き詰められた入念な作りとなっている。

墓室から発見された副葬品の中には、短刀や鉄鏃などの武具の他、玉類が22点あり、水晶製切子玉、碧玉製管玉、琥珀製棗（なつめ）玉、ガラス小玉、金銅製空（うつろ）玉と多種にわたる。

この古墳の年代は石室の形態や副葬品の多様な玉から７世紀まで下り、川田谷古墳群にあってその終末に近い古墳の姿を示している。


横穴式石室実測図

－多様な玉類－

金銅製耳環

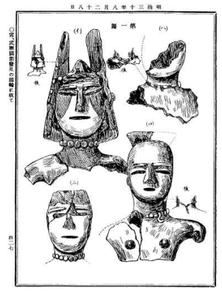
金銅製空玉

水晶製切子玉

川田谷古墳群の埴輪

川田谷古墳群から発見された埴輪は、古くは、明治時代に当時の研究者の著述の中で紹介されている。とくに、明治29年（1896）年に、字若宮の古墳にて発見された埴輪は、八木奘三郎氏が『東京人類学雑誌』にて紹介し、古代の人々の習俗の研究の面から当時の研究者に議論されている。

この字若宮出土の人物埴輪は現在も、東京国立博物館に所蔵されている。

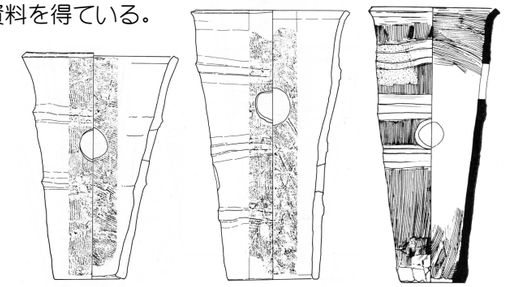

『東京人類學會雜誌』
第12巻137号　1897

円筒埴輪

円筒埴輪は、古墳の周囲に立て並べ、死者が葬られている古墳と現実の世界をへだてるものともいわれている。

３世紀の古墳発生期から、古墳時代後期の６世紀まで継続して作られ、また、古墳から発見される出土品の中ではもっとも数が多く、古墳研究の基礎資料となっている。

川田谷古墳群では、前方後円墳であるひさご塚古墳と、若宮Ⅱ遺跡（柏原４号古墳）の古墳跡の発掘調査によって、まとまった資料を得ている。


若宮Ⅱ遺跡（柏原４号古墳）出土　　ひさご塚古墳出土

人物埴輪

人物埴輪は、５世紀末に関東地方に広がり、埼玉古墳群の稲荷山古墳への設置はその早い例である。

６世紀後半になると小規模な古墳にも人物埴輪が設置されるようになり、川田谷古墳群のひさご塚古墳からも、男女一対の人物埴輪が発見されている。

同じく柏原支群に属する字若宮から栗原司氏が採集した資料は、川田谷古墳群を代表する人物埴輪である。

栗原司氏採集資料

ひさご塚古墳出土資料